

第10回生駒市総合教育会議 会議録

1 日 時 平成29年5月29日(月) 午前9時40分～午後0時34分

2 場 所 生駒北小中学校 多目的室

3 授業見学

4 協議事項

- (1) ICT機器活用の意図、今後の可能性について
- (2) 小中一貫教育1年を終えてその成果と課題について
- (3) その他

5 市側出席者

市長 小紫雅史 副市長 山本昇

6 教育委員会側出席者

教育長 中田好昭

委員(教育長職務代理者) 山本吉延

委員 上田信行

委員 神澤 創

委員 坪井美佐

委員 飯島敏文

委員 寺田詩子

委員 浦林直子

委員 レイノルズあい

7 学校教職員出席者

生駒北小中学校 校長 森 能 伸

生駒北小学校 教頭 前田香織

生駒北中学校 教頭 堀口和行

教諭 細川雅史

8 事務局職員出席者

教育振興部長 峯島 妙

教育総務課長 辻中伸弘

教育総務課課長補佐 山本英樹

教育指導課指導主事 前田伸行

教育総務課(書記) 鬼頭永実

教育振興部次長 真銅 宏

教育指導課長 吉川 祐一

教育指導課課長補佐 城野 聖一

教育総務課(書記) 牧井 望

7 傍聴者 2名

○開会宣告

○協議事項

(1) ICT機器活用の意図、今後の可能性について【資料2】【資料3】【資料4】【追加資料1】【パンフレット】

- ・授業内容について、細川教諭、前田教頭から説明
- ・ICT機器活用教育の現状について、吉川教育指導課長から説明

細川教諭：低学年でのタブレットの使用はカメラ機能による撮って見るというものが主な活用方法である。校外に出るときには、デジタルカメラを併用しながら、授業を行っている。各教室に電子黒板を備え付けていただき、とても使いやすくなっており、授業にも活かせるようになってきた。本日は写真を撮ってきて、それを見せる点、手元のものを指導する点、作品を発表する点という3点で活用した。

また、電子黒板を使う利点として、電子黒板で見せることで、子どもの今どこを見ればいいのか分からないといった戸惑いが減ったと感じる。電子黒板に罫目を映すこともできるので、その点を活用して、ノートをきれいにとれなかった子供が、筆算や視写する際にきれいに書けるようになるなど、ノートの使い方の指導にも役立っている。最後に、4月の授業参観でも、従来保護者の方は教科書がなく、何をしているのか分からなかったが、電子黒板に映しながらすることで、保護者の方にもわかりやすい授業ができるようになった。授業後保護者の方からも良かったというお声を頂いた。今後も電子黒板を使いながら授業をしていきたいと思った。

前田教頭：昨年度生駒市の指定を受け、以下の2つの目的を持ちながら、ICT教育を実施している。1つ目は最新のICTを使いこなして自らのスキルを上げること、2つ目はICTの活用によって子どもたちが学力を向上させていくことである。

前者については、昨年度の教職員の自己評価では、ICTを活用した授業の実践を91%が「できた」「概ねできた」としていた。中間期の調査よりも30ポイントほど上昇した。また昨年9月から授業にタブレットを導入し、程度の差はあるものの、全ての教員がタブレットを操作できるようになった。本校にはICTに堪能な教員はいなかったが、折に触れてタブレット端末をどのように使ったかをアピールすることで広まっていったのではないかと思う。現在、電子黒板を日常的に使う教員が半数以上いる。昨年度市教育委員会で電子黒板を一台導入いただき、以前からあった1台と合わせて合計2台となった。しかし、使いこなせる教員がいなかった。なぜなら、保管場所から自教室まで移動させ、出し

入れ時には扉を2枚外さなければならないので、実際使用するためには労力も時間もかかったからである。このことが、電子黒板使用の普及を妨げたと言える。現在では、マグネットを外すことで電子黒板を簡単に準備できる。手間暇かけずに日常的に使える環境づくりがICT機器の普及には欠かせないと感じた。

後者については、明確にその成果が分かるデータというものはない。変化が見られたとしても、学力向上の要因はICT活用のみではないと思う。全国学力調査の結果、本校の児童生徒の家庭学習時間が平均より少なかったため、本校では昨年より家庭での自主学習に力を入れようと考えている。6年生で家庭学習時間30分以下の児童が30%近くおり、県平均の2倍であった。逆にスマートフォン使用時間は長く、1日1時間以上使うという児童が30%おり、県平均より13%高かった。そこで、インターネットの使用が多いのであれば、それを学習にも反映させたいと思い、タブレットやスマートフォンを使ったインターネット学習を昨年秋から始めている。市内の学校に先行して始められたイー・ライブラリーである。IDとパスワードを入力すれば、学校内では勿論、学校でした続きを家庭に帰ってからも学習できるシステムである。内容は、ドリル学習、調べ学習、まとめノートづくりで、それを家庭でも行えるというメリットがあった。また履歴も残るので、教員も声掛けがしやすかった。家庭学習の新しい形態として存続させたいと思っている。他にも、正誤がその場ですぐ分かること、持たせやすいことなどのメリットがあり、学校で推奨してきた家庭学習の時間(学年×10+10分)を71.7%の児童が達成している。なお、イー・ライブラリー導入前は55.3%だったので、導入後15ポイントほど伸ばしている。この点が導入し、良かった点だと思う。

保護者にもイー・ライブラリーの体験説明会を開催し、理解を深めている。普及させていくには、保護者の皆様に直接説明した方がいいのではないかと考えて、育友会の総会に合わせて希望者に説明会に参加いただいている。また、イー・ライブラリーを使うことについては、販売元の社員一人に講習会を開いていただいた。細川が電子黒板について先述したように、イー・ライブラリーに関しても、授業参観で見ってもらうことを含めて、保護者へのアピールを行っていく予定である。

最後に、タブレット端末を一人一台揃えていただけるようにと思う。現在は5人に1台しかなく、現在の使用はグループ活動時のみに限られている。また、教室に据え置きPCを用意していただきたい。現在は常時ネットワークに接続されているPCは、全校で3台しかないが、各教室にあるとより電子黒板やタブレットを活かした授業ができると思う。

(質疑)

小紫市長：まず細川教諭の報告についてご質問などあるか。

上田委員：昆虫館でのフィールドワークの実体験を粘土で形にする、思いを形にして伝えるという狙いが根底にある授業だったと思う。ICTを活用して写真を撮るだけでなく、写真を撮りながら児童たちとのコミュニケーションができていたのが印象的だった。写真を撮るだけでなくもう一步踏み込んでいるのが良かった。生徒の作ったものをドキュメンテーションするというのに非常に意味があると思うのだが、思いを形にしてそれを最後にシェアする、そこで子どもたちがいろんな体験があったのだなということ、作品を通して語り合うということができていた。終了後、タブレットを通して展覧会的に作品を共有すれば瞬時に全員が見られるので、みんなで作品についてワイワイと話すなどしていただけたらいいと思う。記録したものを通して、授業内容の共有をし、生徒間、生徒と教師とのコミュニケーションが深まっていけばと思う。

神澤委員：上田先生が仰ったように、機械をどこまでコミュニケーション手段とするかということが重要。子ども側が、どのように実践的に取り組んでいくかがこれからの課題になってくる。ICT活用には、記号化された情報が中心になってしまい、記号化されていないものをどのようにICT教育の中に盛り込んでいくかという工夫をしてほしい。

小紫市長：子どもたちは授業中大変集中していたし、先生の説明もカメラを使っていて分かりやすかったと思う。また記録によって1週間前の記憶が子どもたちのなかで蘇り、子どもたちのいきいきとした姿を見ることができた。ICT教育に関しては10分ではとても話きれいなような成果があると思うが、北小中は勿論、他の先生方にも共有してほしい。

小紫市長：次に前田教頭からの報告について、ご質問はあるか。

山本委員：ICT活用授業を拝見して、移動しなくていい電子黒板は必要であると感じた。すぐに使えないと活用しなくなる。すぐに見せたいときにパッと見せられない。校内でICTを活用することのメリット等に関してICTを活用した指導に関わる研修などはしておられるのか。

前田教頭：当初、電子黒板の販売会社から夏休みと2学期の短縮校時中に2日間の研修を受けた。研修を受けることで、自分たちも使えるということを実感し、使用意欲につながった。

日々使っている先生方に聞くと、授業の導入部分で前回の復習をするが、電子黒板に前回授業板書を記録させておいて、そのまま映せば、復習するのが簡単になり、時間短縮できる。

山本委員：ICT環境の整備について、全国的に見ても奈良県は低いですが、一方で、ICTを使うとこんないい授業ができるのかというメリット感があまり先生方の中で浸透していないところがあるのではないかと感じている。

使いにくさを改善することが重要であると思う。また、去年は、生駒市ではICTがきちんと活用されていないという実感があつた。そのメリットを実感できるような研修がされていないと浸透にはつながらない。

本日の授業についても、その思考を可視化できる、瞬時に共有できるといったメリットをどれほど自覚しておられるのかという疑問が浮かんだ。カメラとして使うにしても、作品の細かい工夫点をICTによってズームアップして子どもたちに見せるなどすれば、遠い席から作品を眺めるよりも、子どもたちにより気付きのある授業になったのではないか。そして自分の作品にもより工夫を加えようという意欲が湧いただろう。教頭先生のお話にもあつたとおり、この点に関しては整備が進んでいない部分もあるようだが、子どもたちが作っているものをすぐ撮影し、またリアルタイムに共有できるという点もまた、ICT活用の大きなメリットである。このような点をきちんと理解し、活用していくことで他の先生にとっても使用意欲につながるであろうと感じた。学校だけでなく教育委員会主催でも研修をしていけばいいと感じた。

小紫市長：生駒市のICT機器の整備状況、どのように活用しているかを校内外の先生に知らせていくことで、ICT機器活用の議論をさらに活発にして頂いて、例えば移動式電子黒板ではだめで各教室固定でなくてはならないのはどういう授業のどの場面においてなのかが分からないことには、現実的に予算計上ということは難しい。また、具体的に電子黒板が必要であると感じさせるだけの授業をしていって頂きたい。そうすることで議会や保護者に対して説明責任を果たすことができる形にしていきたいと思う。

飯島委員：日常的に教室に配備されるという条件を満たさなければ使いにくいものだろうが、ICT機器使用のメリット、あるいはICT機器がないとできないことのイメージをお持ちになることが必要である。大学の私の学生に聞いても、彼らがスマートフォンを思いだしたのは高校生になってからであり、今回授業して下さった先生もお若いとはいえ、そういった意味で今の子どもたちに比べればデジタルネイティブではない。今の子どもたちはスマートフォンがある状況でそれを使いながら育ったので、ないと不便であるという感覚を持っており、またスマートフォンがあればこれができるのにといったアイデアやイメージを持っている。今は普及率が低いですが、今後若い世代を中心にICT機器を活用した魅力的な授業がたくさん提案されることによって、自治体での普及が深まるだろうし、普及すればするほど使い慣れていくはずである。北小中学校では全クラスに配置されているのだから、山本委員が指摘されていた、子どもたちの作品の工夫点の共有や離れたところにある二つの作品を比較する

ことができるなどといった、ICT機器活用によってしかできない授業、またその良さを発信する役目を担っていただきたい。

小紫市長：各小学校での研修は勿論だが、学校間でICTに特化したものか、あるいは各教科に特化した情報共有・意見共有ができるような研修があると思うが、事務局から説明していただいてもよろしいか。

吉川課長：今年度にICT教育の推進委員会を立ち上げていくが、他に教科等研究会において教科の先生方の横のつながりを深めていくような会も開いている。その中でその教科にあわせたICT活用方法について話し合ってもらい、各校での現状を把握し、ICTが得意な先生から不得意な先生への活用方法などの情報提供をしていってほしいと思っている。

小紫市長：今説明していただいたような枠組みもあるわけなので、その中で北小中には生駒のICT教育を引っ張ってほしい。

神澤委員：大学の授業で、100人の受講生相手では板書が見えないので、ホワイトボードは使っておらず、既にできているパワーポイントをスクリーンで映している。それを活用すれば、ネットに載っている動画をそのまま映すこともできるので、先ほど言った音の問題などもクリアできる。そのように、機械があることでいろいろな作業が簡略化されるものだが、先生が黒板に字を書いているのを生徒が見るとするのは実によく、「あれこそ先生だな」と感じる。情報を伝えるだけでいいならロボットに取って代わられてしまう。簡略化されてどんどん便利になるのはいいのだが、ICTで一番大事なものは、人間と人間とのコミュニケーションの部分が子どもたちとの間でどう扱われていくのかであり、それが気になっている。これからの教育にとって、一方で人と人のアクティブラーニング、もう一方でICTによる効率化というものが重要視されている。黒板を残すのか、あるいは電子機器をより導入していくのかなど、予算なども絡んでくることだが、そのあたりの兼ね合いはどう考えているのか。

小紫市長：どう人間らしさと機械の便利さを融合させていくのか、あるいは小学校1年生から中学校3年生で使い方も変わっていくのかなど、備品が揃うまでは、なかなか議論が進まないところではあるのかもしれない。

浦林委員：先程の授業は特別支援の浦川先生に注目しながら見させていただいたが、「電子黒板がある分、板書できる黒板の面積が狭くなってしまう」と仰っていた。先生方は板書する黒板の必要性も感じていらっしゃるのではないかと思った。

寺田委員：昔に放送教育や視聴覚教育というものをしてきた経験があるが、若い先生からなぜそれが必要なのかと問われたことがある。その時に答えたのは、根本は先生の授業であるということだ。その補助としての放送教育、今であればICT機器であって、人が教育の根本になれば、子どもたちは潰れてしまうのではないかと思う。先生の字がきれいだと言った生徒たち

もきれいになる。そういうことが重要。

また、今日感じたのは先生の撮影の位置が高いので、より子どもの目線に立って撮影すると、先ほど接写するなどの案が出ていたのと同じで、より子どもが分かりやすい工夫の仕方が見えてくる。先生方は根本に立ち返って、子どもたちの立場に立って、ICTに振り回されないようにICTを活かすことを考えながら、指導していかなければならない。そこにこそICT機器を教育に使うありがたみを感じられるはずである。

小紫市長：確かに、顔だけアップにしていくということや細かい工夫だけをアップにしていくこともできただろうと思う。

レイノルズ委員：皆様のお話を聞いていて、ICT活用のメリットについて話し合っていること自体に違和感がある。ICT機器はあったらいいに決まっているのではと思う。ICTとアナログの組み合わせの中でベストな状況、費用の問題が現状としてあるのだろう。本日の授業を拝見し、電子黒板というのはプロジェクタがあればできるものなのだろうと感じたし、プロジェクタなら安価である。あるいは生徒のスマホを活用してイー・ライブラリーを使っているというお話があったが、それと同様に先生が所持しているスマホを活用しながら対応できるのではないかと思った。電子黒板の機能を満たすものはないのかなど、今あるものでお金を掛けずにICTを活用する手立てを現場のアイデアを出し合いながら、模索していければと思った。

小紫市長：板書機能はプロジェクタでは補えない部分であって、それをどこまで活用できているのかという部分を今まで話してきたかと思う。しかし実際、具体的にどこまで整備していくのか、ICT教育を実施していくかという、どの学校でも不可欠な課題を示していただいた。既存の機器の活用を検討していくのも良いだろう。ただ個人のスマホを使っていくことに関しては、セキュリティなど様々な規制があるのかもしれないと感じる。

中田教育長：基本的に本日の会議はICT教育実施についての一つの方向性を見出したいというものがある。編集力、つまり集めた情報から何かを創り出す志向を生徒たちに求めていきたい。ここまでのお話を聞いていて、様々な機器が出ていて長所短所があるだろうと思う。若い先生でスマホを活用している先生もおられる。9歳までの子どもの約30%がスマホを持っているというような、生まれたときからスマホがある、私たちの想像を逸した環境で育った子どもたちにとって、映像、におい、音などといったものがどれだけ意味を成すのかも分からないし、また教員によってそれをどこまで具現化できるのかということに関しても、個人差があるのではないかと思う。現場で何ができるのかということも常にプレッシャーを感じながら携わってってもらいたい。情報提供していただいたもの、今回出していただいた意見を実践に活かしてほしい。またこの後

で現場からこういった実践例が返ってくるのかも期待しながら、生駒のICT教育をまた一歩進めていってもらいたい。予算にも限りがあるが、現場は欲しいものもたくさんあるだろう。優先順位を付けて、一定の方向性を持っていないと、保護者にも説明責任を果たせないまま、不満の声ばかり上がってしまうだろう。また他市の状況も見ながら、生駒市なりの指針を持ってより活用を深めていきたい。

上田委員：新たな環境、新たな教材を使うことのできる教員のモチベーションが高い状況の中、新たな指導のモデルを作っていくチャンスである。教員の方々の中で実践していることを議論しながら発展させていく。ICT教育には、何か理想的な形が先行してあるものではないので、日常の授業でひとつひとつどう変えていくか考えていく中で、何かモデルが出てくるものだと思う。教員の資質も良くなっているし、面白くしていこうという議論をより活発化させてほしいと思う。また、スタジオ型の授業の新しい形が今回の授業の中にあった。スタジオでものを作るということで、子どもたちが考え、そして発表したり共有したりということができていた。あるいはあの授業が劇場になったらどうか、経験が作品化される、感じたことそのものが作品だという感覚、そういった新しい能力を引き出す授業を考えていくべき。ICT機器は、利便性のためだけではなく、生徒たちの新しい力を引き出すものであるべきである。そのことを確認するために、自らの授業を抽象化していくということが、今の教員に求められる。先生同士の話りの場を作るきっかけとなるべきだ。そのようなことを行った翌日の授業はそれまでよりも良くなっているはずであり、そういった教員同士の話し合いを引き出すきっかけとして、ICT機器があると感じる。そのようなモデルが作っていけるようにして欲しい。

小紫市長：本日の授業は面白い授業をされていたので、それをさらに改良していってもらうためにも、細川先生に今回出して頂いたご意見をフィードバックしていただきたい。感動や感情を作品にし発表する、教育大綱に書いてあるままのことかもしれないが、ICT活用の目的を考えてほしい。また、質問だが、イー・ライブラリーについて聞きたいのだが、これは生徒に義務としているのか、あるいは任意なのか。

前田教頭：家庭用は任意で、学校ではPC室で実施している。

前田主事：イー・ライブラリーについて説明させていただく。元々は学習探検ナビという活用があまり進んでいないが、本来は先生用のICT教育に関わる資料や、授業中電子黒板に映す資料が入っているソフトである。また、その資料に沿って授業をした後に、子どもたちがPC室で復習できるドリルが入っている。IDとパスワードを配布し、家のPC、スマホからも使えるようになっており、また学校の方もその進捗、問題の正誤まで

担任教師が確認できる。昨年度試行運用し、今年度から本格導入した。

小紫市長：そのような取組も、北小中で実践している他校にはまだない部分である。そういったものも広めていてもらいたい。

使用する機器、実施する学年、教科などを考慮しながらアナログとICTのベストミックスを模索していくとともに、具体的に活用を深めていてもらいたい。図工は勿論だが、例えば英語なら外国と繋いで現地の人と対一のコミュニケーションをしていこうといったアイデアもあるだろうし、また算数・数学での活用もしていていると伺っている。ICT教育の成果というのは数字に反映しにくい部分もあるかもしれないが、具体的な成果を見せていただきたい。また数字を伸ばすというところばかりでなく、今まで伸ばせなかった表現力、プレゼン力などが高まるようにして欲しい。英語教育に関してもやっていることだが、教育委員会、現場の詳しい先生、外部の講師の方など、指導していただく場、話し合いの場を作っていくことで、いろいろな方の協力を得ながらやっていきたい。

浦林委員：生徒一人一人にタブレットがほしいという話があったが、先日個人的に慶應義塾大学の中室牧子さんという教育経済学の方のお話をお伺いしたときに仰っていたことを思い出した。教育にはインプットした結果としてのエビデンスが必要らしい。タブレット端末を使っても効果が期待されないことがある。子どもたちへの効果ははっきりとしないままに、導入していこうという流ればかりが高まっているが、費用対効果を考えてから導入していかななくてはならない。

小紫市長：同意見である。より小規模な市町村ならとりあえず全校に導入し、ICT機器を導入した教育熱心な自治体であることをアピールしていたりするが、そういったことはやはり本末転倒であると言わざるを得ない。先の電子黒板の件と同様に、タブレットが一人一台あることで何が期待できるのかといった具体性がないとやはり導入できないと私は思う。ICT活用は特別支援用にということから徐々に始まっていったという経緯があるが、どのようなソフトを使えば効果があるのかも個々に違っていると思うし、優先順位を考えると、健常な子どもたちよりも支援が必要な子どもたちに使っていくのが妥当ではないかと思う。そのような思いで市として導入したが、ただ時代の流れとしてICT教育というものがあるので、生駒市の普及率が低いからどうというのではないが、具体的な議論をしながら検討もしていきたいと思う。

山本委員：私自身はタブレットの可能性を感じる。むしろ今の時代のデジタルネイティブな子どもたちにとって、PCの基本操作を教えるようなPC教室が学校に必要なのかとを感じる。現在実施しているものが廃止できるのであれば、そこに使う予算をタブレット供給に充てられるだろうし、ある

いは学校内のネットワーク環境の改善にそういった予算を充てる方が、より費用対効果も上がるだろう。

小紫市長：機器の購入運用の仕方も段階的にやっていけばいいと思うし、タブレットの効果自体も不明瞭なので、現段階では何とも言えない。ただ、PC教室がタブレットに取って代わられる時代も来るだろうと思う。教育関係の施設もやはり合理化していかねばならない部分も見えてくるので、そのあたりの整備も進めていきたい。

本日は、授業内容などの細かい部分にまでご議論いただいたが、今後もまた教育委員会と現場の学校で議論していただいて、また市としてこれからどうしていくのか考えていきたい。

(2) 小中一貫教育1年を終えてその成果と課題について

- ・小中一貫教育1年を終えてその成果と課題について、生駒北小学校、前田教頭から説明【資料5】

前田教頭：小中9年間で何を教えるかということが、小中一貫校における教育の課題であり、楽しみであり、醍醐味であると考えている。小中の先生が集まり、この学校に何が足りないのか、何をしていくのかという話し合いを重ねた。

本小中一貫校における特徴は「乗り入れ授業」である。小学校から中学校へ音楽の先生が、中学校から小学校へ英語の先生、体育の先生、図工の先生がそれぞれ教えに行き、小中双方で補い合って授業を進めている。子どもたちの学力向上、並びに義務教育の9年間というまとまりで何を教えたいかということを考えてきた。また、5、6年生は45分授業を改め、50分授業になっている。

9年間という流れの中で特色を付ける授業として、総合の時間として取り入れた「伝統」がある。新しくできた和室を有効活用し、茶道などを学ばせている。

項目9にリーダーとして活躍していく人を育てたいというのを挙げている。小中一貫校となって、児童生徒たちの人・心としての成長に気が付くことがある。小学校ではリーダーだった6年生が中学校でビギナーになる。このことは子供の心の成長にとって、とても大事だと感じた。小学校の間は先生方の言うことを聞かなかった児童が中学生になり、部活動の先輩らに教えられ、先生の言うことや学則を守ることができるようになってきた。中一ギャップの解消について、小中一貫校がその点に強みを持っていると思われるが、一方で成長過程において中学生へのステップアップを実感することは、とても重要であることも確かであり、その点は小中一貫校の弱みかもしれないとも言われている。小学生から中学生になるに当たって、校舎や先生といった環境が変わらないと

いう安心感は残すとともに、あえて制服、体操服、通学鞆、校章などは新しくした。このように完全な統合をしなかったことで、子どもたちが小学校6年生から中学校1年生にステップアップしたと実感し、ひとつの区切りをつけてくれていると思う。

課題については資料裏面に書いており、少しずつでも改善していけるようにと思う。

最後に、先生方の変化としては、小学校の先生が部活動や進路指導に関心を持つようになり、中には部活の手伝いをする先生もいた。また小学校の先生方は、年に一度中学校の授業を見学してもらっており、卒業生の様子を見られるということを楽しんでいる。

堀口 教頭：中学校のメリットとしては、中学生が小学校の様子を日々見ながら生活できる点である。中学生が小学生の子どもたちを見る目は、慈しみの心を学んでいるのだと分かる。例年保育園で行っている職業体験のとき、中学生同士で接するのとは違う、保育園児たちを見る優しい目をするのだが、その時と同じ目で小学生を見ているなど感じる。日々の生活の中で、そのような心が育っているというのは小中一貫校にしてよかったことだと感じる。

また、中学校の立場としても、義務教育の9年間というまとまりを見通しやすくなった。小学校で培った地域の産業・伝統に関して、中学1年生で茶釜作りという形でさせてもらっているが、小学校からの学習につながっていると思う。そして、生駒市の産業から奈良県の産業、日本の産業と視野を広げていき、また職業体験や修学旅行を通して、世の中の歴史、伝統、産業に関して理解が深まると思っている。

小学校高学年の授業時間延長とも関連して、小学校の校時に合わせていく中で、中学校に学びタイムを設定した。小学校の昼休みの時間に実施しており、基本的な問題に向かっている。昨年から中学校2・3年生で少人数教育を実施しているが、今年度から中学校1年生についても技術の時間に少人数制を導入しており、中学校2年生でも少人数教室実施科目を増やし、中学校3年生では少人数学級編成ということで、よりきめ細かい指導ができるように取り組んでいる。

(質疑)

飯島 委員：統合していく部分と、その一方で小中学校間のステップなどの必要な部分もあると仰っていたが、それを実感した出来事など具体的に何かないか。

前田 教頭：給食配膳時は配膳着を着るというルールにした。生徒指導上の問題で、学校内のルールを統一するときは、厳しい方に統一している。

飯島 委員：小中一貫校も始まったばかりで、変化を付けていく点と、均一化を図る

面のどちらもまだ出てきていない部分があるだろうが、何か児童生徒に変化があったときは、他の学校との共有をしていくのが良いと思う。

小紫市長：私自身「中一ギャップの解消」という言葉だけは知っているような状況だが、むしろギャップ、区切りを残していった方がいい部分もあるようで、どのように運営していったからどういう効果を得られたというようなデータを示していけば、よりフィードバックが得られるだろうと思う。

山本委員：小中一貫校ならではのビジョンが必要ではないかと思う。児童生徒数の減少からやむをえず一貫にしているというのではなく、生駒の教育の在り方をリードして行ってほしい。具現化するために困難もあるだろうが、その都度何らかの結果というものは得られるだろう。現状では他の学校との差異を感じられないが、今後の見通しとして何かあるのか。

森校長：本地域の長期的な目で見たい一番の課題は、子どもの数を減らさせないということ。そのためには、自分が親になったとき、生駒北小中に子どもを通わせたいと思う、いわゆるリピーターを増やせるような授業づくりをしていきたいと考えている。この学校で毎年学級編成によって横のつながりを強固にすることは難しいが、その分小学校1年生～中学校3年生の縦の長いつながりを築いていけるという可能性があり、またそれをどう具現化していくかという課題もある。しかし、そのために新しいことをどんどんやっていくということは、カリキュラムの違いなどからも難しいので、無理のない範囲で小学生と中学生の間で、普段の付き合いという形のつながりを意図的に作っていく。昨年度の合同運動会がその例だと思う。まだ新校舎での生活が始まって2ヶ月であり、今は計画を立てていく段階だと思う。本校には、小学生と中学生と一緒に登校でき、また休み時間など気軽に小中の教室を行き来できるなどという強みがある。更に年間数回でも行事等で小中間に行き来が生じれば、そのようなつながりはより広がっていくのではないかと思う。

小学校6年間は小中一貫校のベースに当たる部分であり、ボトムアップしていくための6年間である。伝統の授業を受けることで、茶道などの自国の伝統に誇りを持って、それを世界に発信できる大人になる。そのような意味でのグローバル化を促進していきたい。そのためにはその伝統に対する理解、相手に伝える力などが必要になってくる。9年間でどれだけのことを教えられるのかという課題があるが、家庭でもそういう大人になってほしいということ語り伝えるなど、家庭と学校からの指導をしていくことでクリアしていきたい。そのような意識で伝統を身に付け、文化祭などあらゆる行事でもそれを発揮して行ってほしい。

行事に関しては、合同にしていくべき部分、分けておくべき部分を考えながらやっていきたい。小中の卒業式は意図的に分けており、中学生の卒業の日を小学生がどのような気持ちで迎えるのか、そういった心を育

てていきたい。

小中一貫教育の形がこれから見えてくるだろうし、その可能性を作り出すという楽しさをここにいる教職員で共有しながらやっていきたいと思っているので、私自身はそういった雰囲気づくりを率先していきたい。

山本委員：ドラッカーの『マネジメント』という本の中で、「企業の目的は顧客の創造だ」という言葉があるが、今校長先生が仰ったことは、この学校に来たいと思う子どもやその保護者を創造するということなのだろう。その創造が、生駒の教育の向上、ひいては生駒北地区の人口増加に一役買うものであってほしい。

小紫市長：小中一貫教育の成果と課題ということで、まだ1年なので構想段階のものも多いだろうが、校長、教育長、教育委員の皆さん、さらにもしかしたら私も、小中一貫教育について何かお話しする機会があるときに、何が狙いで何が良かったというのを説明できるということが大事だ。校舎も設備も新しくなって、住民とのつながりも強く、伝統産業と最先端を持っている。それを授業や子どもたちがこの場所で接することができる経験に反映して、他地域との差異化して行ってほしい。

浦林委員：校長先生は、学校教育の本質、そして未来を語っておられるなど感じた。市長が冒頭に、ICT教育の先に何があるのか、子どもたちが社会に出るのに何が必要か、そういったことを意識しながらのICT教育はどういったことを目指していくかという大きな問題を見つめていかなくてはならないと仰っていた。再度受け売りになってしまうが、成長後の子どもの追跡調査をした中で、10～20年後本人の利益に関してではなく、社会的利益（犯罪傾向にない、社会活動に積極的であるなど）となるような人材になるのは、非認知能力（IQではなく忍耐力、協調性など）が高い者が多い。そういった力は学校生活の中で育まれていくものだと思う。ただ勉強ができるようにするなら学校でなくて家でやればいいのであって、友人関係、先輩後輩関係など幅広い人間関係を築き、社会性を身に付けられるというのが学校に通う価値であり成果である。それに加えて、地域の伝統的な作法を身に付けさせている。これからの未来を担う子どもたちにとって、ふさわしい教育をしていただいていると思うので、その部分をしっかりと芯を持って続けて行ってほしい。

小紫市長：浦林委員、教育長、他皆様が仰ってくださった子どもたちに必要な能力というものは、もしかしたら30年後にはいらなくなっているのかもしれない。何年後何が必要になるか分からないが、だからと言ってそのまま放置するわけにはいかないなので、分からないなりに議論しフィードバックする中で、生駒の教育を考えていく必要性を感じる。子どもたちの今日明日といった直近の未来のことや何十年後という未来のことも考え、現場と対話しながら、教育を進めていきたい。例えば、バングラディシ

ユなどで教材DVDだけ郵送して、それで成績をどんどんあげているという地域もあるらしいが、それを導入し、後から足りない能力をどう補っていくかといった議論もできるだろうし、考えるほどいろいろなやり方が出てくるだろう。

山本委員：今の発言は教育にとってとても大事な地域についての言及であった。バングラディッシュでは教育は教材だけあればいい。というのも人と話さなければ明日生きていけないから、わざわざ人間関係を築く場所が無くてもいいのである。しかし、生駒はそうではないだろう。地域性が一番大事である。さらに生駒の中でも地域性に差がある。それを踏まえた上でどう生駒市全体を見ていくのかを考えなくてはならない。

小紫市長：その点に関しては私も絶対間違いない軸を持ってやっている。今日は議論を取りまとめるとかいったことはなく、ブレインストーミング的にやってきた。第一に、ICT教育に関しては、現場では研修も含め具体的に活用し、その事例を一つでも多く示していただいて、一方で教育委員会でも活用の内容をじっくり話し合っていて、その両方を見ながら生駒市としても設備やソフトの整備などしっかりとやっていきたい。第二に、小中一貫教育について、北小中一貫校には市内外から注目が集まっていて、内容的な成果を上げていただくとともに、保護者、議会などに説明していけるような形で取りまとめていただければ、大変ありがたいと思う。

(3) その他
なし

○閉会宣告

午後0時34分 閉会